

太宰治著述一覽稿(Ⅸ)

——昭和二十二年自一月至六月——

山内 祥史

トカトントン・群像・新年号、第二巻第一号・昭和二十二年一月一日発行・78頁・「創作」欄

『ヴィヨンの妻』(筑摩書房、昭和二十二年八月五日)に、全文収載された。

『戦後文芸代表作集創作篇』(黄蜂社、昭和二十三年十月一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕 (丁)「創作展望」(「新文学」第四巻第二号、昭和二十二年二月一日)については、「男女同権」の項を参照のこと。

高山毅「三十代の作品」(「若草」第二十二巻第二号、昭和二十二年三月一日)には、つぎのように記されている。

最後に私は太宰氏の作品を読んだ。氏は今月は「トカトントン」(群像)「親友交歓」(新潮)「男女同権」(改造)と三つの作品を書いているが、そのどれもが先ずそれぞれにちがった形式をとっていることは注目されねばならぬ。三十代作家の欠点の一つは、どんな素材を扱かつても、その形式は常に一定したもので、ヴァラエティを持

たぬ傾きがあることだが、太宰氏はこの弊害から常に脱出すべく試みている。そうしてこれらの作品は、誰が読んでも面白いということ、第二に挙げなければならぬ。小説の目的が真実を追求するものであることはいうまでもないが、そのことは、何だか知つたか振りをして深刻な面付きをして洗面つくつて或る特定の文学読者にしかわからぬような謎めいたものを書いて行くことにあるのではない。モツと民衆の懷にアツサリと入つて行くべきものであるにちがいない。太宰氏の作品はこれらのよい要素をそなえて来たようだ。／枚数が残り少なくなつたので簡単にしか触れ得ぬが、「トカトントン」という作品は恐ろしい作品だ。「冬の火花」において示された懷疑が、もつと現代人とつながりをもつものとしてこゝにあらわれたといつてよい。八・一五の報道を聞いて或る感慨にふけつていたところにトカトントンという音がして来て、何か悲壮も嚴肅も一瞬のうちに消去り、その後何をやろうとしても常にこれがつきまとうというのだが、人生の深淵をフト垣間見たとでもいおうか、無気味な魅力をもつた作品といつてよい。想うに現代人はめいめいが「トカトントン」の声に悩まされ、こゝから如何に脱出するかが当面の課題となつてゐるのではなからうか。「親友交歓」は誠に無礼とも何とも形容の出来ぬ、或る男のことが書いてあるのだが、その人物像の見事な形象化は感嘆のほかない。／次に「男女同権」は一種の倒錯的な作品であるが、それでいて封建的な圧力のもとにおける女性の心理を心にくいまでに剔抉しており、何か深く考えしめる興味ある作品であつた。／かくて先に結論としてあげておいたように、三十代作家の代表として太宰氏の活躍は見逃せ

ない。しかし、四十代ともつながりのある太宰氏をその代表者とする
ことは、三十代の作家たちにとつて決して名誉ではないはずだ。

外村繁「太宰治『トカントン』(群像一月号)―創作短評―」(人間
間)第二巻第四号、昭和二十二年四月一日)には、つぎのように記さ
れている。

トカントンといふのは金槌で釘を打つ音である。／終戦直後宮庭
で聞いたその音が、「不思議なくらゐ綺麗に私からミリタリズムの幻
影を剝ぎとつてくれた」代りに、「何か物事に感激し、奮ひ立たうと
すると、どこからとも無く、幽かに」その幻影が聞こえて来て、身動
き出来なくなつてしまつた青年の心情が、この作者らしい正確な感覚
と、伸びのある暖い感情に裏打ちされた好短篇である。／読者は多分
読みながら時々噴き出してしまふであらう。しかしその途端に、トカ
ントントン、さうしてその繰り返しが気にならず、その技巧さへも少し
も気にかゝらないのは、久しぶりにこの作者の創作感情が初々しく流
露したからであらう。／その青年の手紙を受け取つた某作家は最後に
イエスの言をもつて一喝を与へてゐる。――などと書けば、私はこの
作家を恥しがらせるかも知れない。一応それはこの作家らしい美しい
技巧であらう。しかし、この青年も某作家も、所詮はこの作家自身の
二つの分身であると思はれる。トカントンはいつもこの人の耳に聞
えて来るに相違ない。同時にイエスの言に霹靂を感じることを願ふの
も、この人自身ではなからうか。この人とは、それはこの作者ひとり
のことではない。誰の耳にもトカントンは聞こえて来るのである。

青野季吉、伊藤整、中野好夫「創作合評会(1)」(群像)第二巻第四

号、昭和二十二年四月一日)には、つぎのように記されている。

伊藤 僕は今いちばん活躍している坂口安吾、石川淳、太宰治、こ
の三人になにか通じる問題がありはしないかとぼんやり思つて来たの
です。この三人の作家にやはり一種の時代の感情が非常に鋭く反映さ
れている。直接作品の中に反映してはいなくとも、書く態度に反映して
いるとか、作品の形式に反映しているとか、なにか反映しているです
ね。(略)／青野 太宰治君の場合には氣質で、この人にはやはりなに
か現実の或る一つを突きあてるような、ごく鋭敏な触覚があると思
う。その触覚の、もつとも鋭敏に働いている作品は僕にはおもしろ
い。その触覚をよく働かせるには、あゝいう形式がよい。あの人の形
式も、前から見ればいく分弱くなつていようだけれども、やはりそ
れでもそう言える。今月の作品でも「トカントン」(群像)という
作品、これなどもやはり戦後の或る一つの共通な心理的の断層を触り
当てている。何かをしなくちやならんというので意気込んでゆく主人
公、しかしそれが完成しないうちにすべてがいやになる。これはほか
の面から追求してゆけばいろいろあると思うが、少くとも今までのニ
ヒルというようなダルなものでなくて、生きた感情として、びしやつ
と自分の触覚でつき当たつたところがある。しかしその触覚の鋭
さのない、たゞ真似とか、身振りだけの作品もある。今月の「メリイ
クリスマス」(中央公論)がそれで、さつぱりおもしろくなかつた。
(略)／中野(略)ところで、今話の出た三人の作家の問題ですが、
これは当然その問題にもひつかゝつて来るのですが、いつたい私は今
月読んだものの中では宮本百合子氏のものに一番動かされた。中央公

論のものは長篇の最初ですが、これだけでも非常に期待できる。その次にとにかく何等かの意味で興味をひかれたのは、やはり、石川、坂口、太宰の三人、これは勿論、個人による差はありますけれども、とにかく戦後文学の一つの共通な問題につながっていると思います。そのあとは、これといつて印象にのこつて覚えられるようなものがない。そこで非常に不思議に思うのは、戦後のこの国の文学では本格のリアリズムというものが非常に嫌われていることです。嫌われるといつて悪ければ、避けて通られているということです。つまり、石川、太宰、坂口の三氏にしても、期せずして戦後の現実に一応取材しながら、かんじんのところで逃避している。(略)それから石川氏の「かよひ小町」にしても、現代の不安に直接答えないで、エスケービズムに終つてしまつてゐる。おもしろいのは「かよひ小町」の中で、共産主義の運動が軽く揶揄されており、太宰氏の「トカトントン」の中でもやはり軽く揶揄されている点で、私はなにも共産主義じやありませんが、しかし、支持するにせよ、反対するにせよ、こう軽く取扱うということに対しては、僕は非常に気持がよいくないのです。言いかえれば、反対批判するならそれでよいから、もつと厳肅な意味を含む問題らしく取扱つてもらいたい。あれでは諷刺にもならん。野暮かしらぬが、私はそう思う。(略)「トカトントン」など最初はこの人でなければと思つて感心して読みましたが、終りの方で抜けた。太宰氏などはもう長い持味の人で、今更リアリズムなどと野暮な注文はしません、私のいうのは、日本の文学全体としてですね。一方にこういうエスケービズムもあつていけないことはないが、もつと外に、本

格的にリアリズムでゆくべき問題がいくらかもあるのじやありませんか。／伊藤 そうですね。非常に目立つ傾向の作家で、こういう不安な感じを捉えている作家は、一樣に社会運動に対してまともに向わない。中野好夫「昭和二十二年文学の問題―主として傾向と意義について―」(「人間」第二巻第十二号、昭和二十二年十二月一日)には、つぎのように記されている。

石川淳の「通小町」にしても「焼跡のイエス」にしても「燃える棘」にしても、太宰治の「トカトントン」にしても、「ヴィヨンの妻」にしても、これらは敗戦後において、少くとも最も早く戦後の世相に取材した好作品であることに疑ひはない。しかもその現代の不安への取り組みは、これを現実の中で、客観的に意志的に解決するのではなく、決して奇蹟的な偶然(何度もいふが人間にとつては奇蹟であり、偶然であるが故に、同時に自分ではどうにもならぬ宿命でもあるのだ)に、作品的解決の契機をもとめるといふ点で、不思議に共通しているのである。「奇蹟はやはり、この世の中にもときたま、あらはれるものらしい」のである。／石川、太宰といふような作家は、現在日本の文壇にあつて、およそもつとも孤高の、狷介の非妥協的な個性であらう。この個性的な作家において、むしろその個性的である故にこそ、他の自発的に時代に敏感な作家群よりも、はるかに鋭敏に、はるかに深く、一つの時代の(外的世相の模写ではなく)もつと深層の心的状態が微妙な震えをもつて反映されているのを非常に興味深く思ふのであり、この作家たちの一群の作品こそ、最も厳密な意味で戦後作品の名前に値するものではあるまいか。

谷沢永一「太宰治ノオト」(『学生文芸』第一号、昭和二十三年六月一日)には、つぎのように記されている。

「傷を負っている」事に対する「自覚」とは、その傷を徹底的にえぐり出す事であると共に、その克服に対する戦いを意味するものである筈だ。その戦い故の呻きこそが、芸術を高めるものであり、只その傷をひけらかすに終るならば、単なる自慰以上の何を意味しよう。こうした太宰の態度こそ、「トカントン」又「ヴィヨンの妻」から「斜陽」に至る戦後作品を系譜づける要素なのである。／終戦直後營庭で聞いた、トカントンという金槌で釘を打つ音が、その途端「不思議なくらい綺麗に」「ミリタリズムの幻影を剥ぎとつてくれた」代りに其後は常に「何か物事に感激し、奮い立とうとすると、どこからとも無く、幽かに、その幻聴が聞えてきて、身動きのとれなくなつた」一青年が、それを或る作家にうちあけるといのが「トカントン」のはなしなのであるが、これは、勿論「誰の耳にも」(外村繁)聞えてくるものではないにしても、見逃す事のできない戦後現象の一つであると思う。／何事かをなそうという熱情を抱き、何をなすべきかも知しながら、しかもそれを行い得ないで一つ所に足踏みし、空しい焦燥を感じるといふ様な、虚無感をたゝえた理論と実践の分裂は、戦後激化の一途を辿る烈しい階級分化の荒波に漂うプチブルの偽らぬ生態であり、その意味ではたしかに之は冷い現実に対する鋭い指摘なのである。／しかし我々にとつての問題は、単なる現実の指摘に止まる事ではなく、それをいかに解決すべきかという実践的な命題にこそあるのではなからうか、文学は決して遊覧バスのサーヴィス・ガールでは

ないのだ。／勿論太宰とても、こうした現実に対しては、一応鋭い批判を浴びせかけるのであり、それ故に「トカントン」が成つた事は争い難いではあるが、あく迄それは自己の内面に棒立ちになつた批判なのであり、嘗ての「きりぎりす」に見られた様な現実裡に於ける行動の一切は放棄され、具体的指針に対する徹底的な不随症は、こゝに彼の批判的精神がもはや成り立ち得ぬ段階に來ている事を物語っている。

竹山道雄「義」(『芸術』第七卷第二号「太宰治追悼」昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

彼はそれ自身が目的であるようなものを何一つも認めることができなかった。彼は田舎の青年団のマラソンを見る。青年たちはただ走つてみたたくつて走り、息もたえだえになつてゴールに入つて倒れてしまふ。その無報酬の情熱に心をうごかされかけたとき、れいの「トカントン」という警告の音がひびいてくる。詩神が「それにも酔うな!」とささやくのである。／彼には精神を支える信仰がなかつた。精神の成立に方向をあたえるものをもつことができなかった。あれもトカントン、これもトカントンだつた。その感受性はいつも監視しているし、しかも内に発する意欲がないので、何物についてもそれに託して生の炎を燃やすべき信頼をもつことができなかった。

高山毅「太宰文学と死」(『文芸首都』第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

以後、ぼくは太宰氏の作品には特別な注意を払つて來たつもりだが「冬の花火」を見るに及んで、いよ／＼主流作家としての地位を獲得

したと思つた。つづいて「春の枯葉」が出、「トカントン」に「親友交歓」「母」「ヴィヨンの妻」と経、「斜陽」に至つて、氏の従来の世界の集大成が行われた。そうしてこの作品の成功によつて太宰氏は揺ぎなき花形作家の地位に祭上げられたのである。ぼくはここでは個々の作品に深く立入ることは許されないが、「冬の花火」は徹底的な懷疑——虚無の文学として無気味な魅力をもたえていた。戯曲の形式にはなつていたが、まぎれなく太宰氏の小説であつた。これはさらに「トカントン」につながつて来、現代人の一人一人とつながりをもつものとして読者の胸をうつた。八・一五の報道を聞いて真剣な気持ちになつてあることを考えていたところにトカントンという音がして来て、何か悲壮も厳肅も一瞬のうちに消去り、その後何をやるうとしても、トカントンという音が聞えて来てどうにもならないといった、現代人の虚無の深淵をフト垣間見たとでもいい作品であり、「母」は復員した青年が女を買いに行つて、女が自分の母親と同じ年齢であることを知つたことが扱つてあつて、ともに珠玉の短篇といつてよい。「斜陽」については既に多くの批評が行われているが、要するに滅びゆく階級の姿態を巧みに描いた美しい挽歌だといつてよい。若し戦後の氏の作品中の傑作をあげよ、といわれるならば、ぼくはこの「冬の花火」「トカントン」「母」「斜陽」を何のためらいもなくあげたい。そうして更に小説ではないが、「如是我聞」を加えたい。この「如是我聞」こそ、太宰氏が作家として自信を持つに至つた所産といつてよく「斜陽」以前の太宰氏には到底書けないものであるであつた。辰野隆、渡辺一夫、中野好夫の諸氏をケチンケチンにやつつ

け、志賀直哉氏にたちむかつている筆勢はするどく近ごろ痛快な好文といわなければならない。

浅見淵「文芸時評—太宰治の死—」（『文芸首都』第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日）には、つぎのように記されている。

また、かれが今度の自殺行を決意するに至つたのは、「トカントン」といふ作品を書いた去年の秋辺りからではなかつたらうか。この作品を契機にして、挽歌めいた哀調が急にかれの作品に加はつて来てゐるからである。そして遺作となつた「人間失格」（『展望』六月号）は、いま読み返して見ると、龍之介の「或阿呆の一生」の場合と全く同じな文学的遺書の役割を果してゐて、かれの今度の自殺行の経緯が臚るげながら捕捉できるやうに描かれてゐる。同時に、その註釈にもなつてゐるやうに思ふ。

福田恆存、椎名麟三、梅崎春生、檀崎勤、林芙美子、伊藤整、豊田三郎「太宰治氏の死について（座談会）」（『文芸時代』第一卷第八号「太宰治追悼特集号」昭和二十三年八月一日）には、つぎのように記されている。

豊田 僕は太宰に関しては、いつも誤解ばかりしているので、「トカントン」という小説を読んだときにも、太宰君自身は何かしよつちゆう虚無の深淵を覗きながら、しかも生き返つてくるのに、あの作品ではそれがうらがえしになつてゐる、何をやつてみてもいけない、虚無にひきこまれてしまふ。しかし、太宰君は、むしろその虚無の中から生れて来るのじやないかと思つてゐた。だから僕は、彼は作家としてもつと長く生きて仕事をする人だというふうに誤解しておりました。

十返肇「太宰治論―罪と革命の意識」(「肉体」第二巻第四号、昭和二十三年八月二十五日)には、つぎのように記されている。

これまで命令によつてのみ行動していた彼等が自分の判断で動くとする、それが如何に困難なものであるかを彼等は初めて経験した。「トカトントン」(「群像」二十二年一月号)は、そのような青年の困憊を告白したものであつた。／＼それでは、その様な青年の困憊に対して馬太伝の言葉を引用して答えた作者の側には如何なる苦悩があつたか。その「容易ならぬ苦悩」とは何であつたか。作者は当時のその様な心境を作者が在住していた津軽地方の生活に取材した作品のうちで具象化した。終戦後に発表した二つの戯曲「冬の火花」(「展望」二十一年六月号)「春の枯葉」(「人間」同年九月号)は、その代表的作品であつた。

小田切進「太宰治の死とその文学」(「文学時標」第五号、昭和二十三年八月二十五日)には、つぎのように記されている。

また戦後の太宰としては、それよりやや早く書いたと思われる「嘘」(「チャンス」(四六年)などで、すでにそのような人間性の醜悪や不正を描いているが、「戦争が終つたら、こんどはまた何々主義だの、何々主義だの、あさましく騒ぎまはつて、演説なんかしているけれど、私は何一つ信用できない気持です。主義も、思想も、へつたくれも要らない」(嘘)というような言葉に、すぐつづいて「男は嘘をつくことをやめて、女は慾を捨てたら、それでもう日本の新しい建設が出来ると思う」とさうりと言われてしまうような、もはやかつての厳しい苦悩やたたかいは、ここでは跡かたもなく拭い去られて、もつぱらこさ

えを利かせた小手先芸をおめにかけて見せるに過ぎなかつた。そのような才能は、「男女同権」「親友交歓」(四六年)「トカトントン」「母」(四七年)などの、ますますみがかれたスタイルの「芸術的」作品をつぎつぎと生み出すこととなるが、これらの多彩な才能の展開が、石川淳や坂口安吾の場合のようなマンネリズムに陥らぬためには、たんなる虚無への陶醉のみで、それをなしうるものではなく、またもとよりその人間性の追求がこうした「芸術性」の上にねそべつていては、なしつづけるものではなかつた。そこでこの作家は自己の限界につきあたりざるを得ず苦渋と停滞はしだいに底深いものとなつてゆく。そうして「ヴィヨンの妻」「父」(四七年)が書かれることとなり、「斜陽」「おさん」(同)などを経て「桜桃」「人間失格」にいたるのであつた。

河盛好蔵「滅亡の民―太宰論」(「改造」第二十九巻第九号、昭和二十三年九月一日)には、つぎのように記されている。

私が始めて読んだ彼の作品が大体に於て純粹派時代のもの、それも危険な病氣から恢復して、幸福で平靜な結婚生活に入つた頃の、太宰君の生涯のなかでも、戦争末期から再度の上京までの郷里―疎開中の時期と共に、恐らく精神肉体ともに最も健康な時代の作品であつたことは、太宰君についての私の見解を強く支配してゐたのである。従つて終戦後の太宰君の作品のなかでは、『嘘』とか『親友交歓』『母』『トカトントン』のやうな小説に彼の本領があるのではないかと私は考へてゐた。少くとも私はこの種の作品を『斜陽』よりも安心して愛読してゐたのである。私はいつか太宰君に向つて、「あなたは新しい

『我輩は猫である』を書く意志がないか。あなたには屹度書けると思ふが」と云つたことがあるが、彼は笑つて答へなかつた。今にして思へば、私が『斜陽』よりも、上述のやうな作品を愛することを彼は心のなかで不満としてゐたのであらう。

平野謙「戦後文学の動向」(『戦後文芸代表作品集創作篇』黄蜂社、昭和二十三年十月一日)には、つぎのように記されている。

しかし、本巻に収められた六篇の作品は、もしそのやうな観点にたてば、ほとんど非戦後文学的作品として一括してもいい、とさへ言へよう。野間宏の『顔の中の赤い月』にしても、『暗い絵』に提出した問題性を回避した地点に造型することによつて、かへつて好個の短篇と呼び得る小宇宙を形成し得たのではないか。無論、そこにはエゴイズムを中心とする戦後の問題がテーマにはなつてゐる。しかし、その主題の処理にはやはり福田恆存や寺田透の難じた弱点も孕まれてゐるのではないか。かへつて太宰治の『トカトントン』の方に濃密な戦後文学的課題が打ちだされてゐるといつていい。その意味でもこれは太宰治の近作を通じての秀作にちがひない。

〔付記〕 初出誌所掲の(T)の「編輯手帖」には、「◎本号は、各方面の非常なお力添によつて、ゆたかな内容の号たらしめることができた。

創作欄には、上林・太宰・森山・豊島の諸氏のほかに、袋氏を煩わして、ソ連の作家プリシヴィンの近作を記載した。」とある。なお、初出誌は、「昭和二十一年十二月二十五日印刷納本」(『編輯兼発行人高橋清次』「発行所／東京都小石川区音羽町三丁目十九番」^{株式会社}大日本雄弁会講談社)で、同誌「創作」欄には、上林暁「死者の声」、太宰治

「トカトントン」、プリシヴィン袋一平訳「湖畔の歌」、豊島與志雄「水甕」の諸作が掲載されている。

メリイクリスマス・中央公論・新年号、第六十二年第一号、第六百九十五号・昭和二十二年一月一日発行・155頁・「小説特選」欄

『ヴィヨンの妻』(筑摩書房、昭和二十二年八月五日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕 古谷綱武「文学通信―宮本百合子・石川淳・太宰治・坂口安吾・中野重治の近作について」(『新潮』第四十四巻第三号、昭和二十二年三月一日)には、つぎのように記されている。

▽太宰治も敗戦後、私の興味をひくしごとを発表しているひとりだが、「メリイクリスマス」の安易は買えない。ひくい自己俗化というよりも、単なる職人的しごとすぎる。それに気やすい大家の筆よごしのようなたゞで書いているが、内容は青つぼい。たしかな読者をもつた作家が、その読者によりかかることは、いちばん危険である。

十返肇「太宰治論―罪と革命の意識」(『肉体』第二巻第四号、昭和二十三年八月二十五日)には、つぎのように記されている。

この時期における作者の製作は「春の枯葉」は勿論として「男女同権」(『改造』二十一年十二月号)の如き諷刺的小説に至るまでかかる反省に根柢づけられた否定の所産である。もつともそれらの作品には、例えば「メリイ・クリスマス」(『中央公論』二十二年一月号)や『チャンス』(『芸術』二十一年創刊号)の如き思いつきの凡作もある

が、いのように作者の根底に存在しているのは、このような現実的な反省の精神である。

〔付記〕 初出誌は、「昭和二十一年十二月廿三日印刷納本」「編集人畑中繁雄」「発行人栗本和夫」「発行所／東京都麹町区丸ビル五階／中央公論社」で、同誌「小説特選」欄には、宮本百合子「二つの庭（第一回）」、石川淳「かよひ小町」、太宰治「メリイクリスマス」、豊島与志雄「非情の愛」の諸作が掲載されている。

昭和二十二年に望むこと・人間・新年号、第二巻第一号・昭和二十二年一月一日発行・108頁・「アンケート」欄

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 十返肇「太宰治論―罪と革命の意識」（「肉体」第二巻第四号、昭和二十三年八月二十五日）には、つぎのように記されている。

周知の様に敗戦と同時に世相が一変すると直ちにしたりげに新指導者が戦争中の軍閥よろしく演説しはじめた。彼等とはもはや明日の希望を語るに忙しく単純に新時代の到来を宣伝した。このとき太宰治が「一九四七年に何を希望するか」を問われて／「何を言つたて、できやしねえ」（「人間」二十二年一月号）／と答えたのは、放縱無頼の絶望的身振りと見えた。それは戦前の氏の態度同様に虚無であり、不貞腐れであるとも見えた。然し、実はここに唯、むなしい冷笑があつたのではない。それは余りにも無責任に希望を放言する「文化人」に対する反撥と、そのような無責任な放言を慎んだ謙虚な反省の自己警告であつたと思われる。事実すくなくとも社会状況はその様な机

上革新論が断言するほど進展せず寧ろ次第に日を追うて混乱を益々深めつつあつたにもかかわらず景気の良さそうな希望の掛声のみ徒らに毀賑を極めていた。この掛声の空しさを最も鋭敏に痛感し反撥したのが所謂三十代であつた事は周知の通りである。

〔付記〕 アンケート回答。初出誌の目次には、「昭和二十二年に望むこと（アンケート）」とあり、標題欄には「昭和二十二年に望むこと（アンケート）／―（到着順）―」とある。回答者は、柳田国男、石川達三、村山知義、河盛好蔵、出隆、渡辺一夫、張赫宙、クボカワ・ツルジロー、野上豊一郎、本多顯彰、小田切秀雄、尾崎一雄、会津八一、片山敏彦、岩田豊雄、津田青楓、石坂洋次郎、石田憲次、湯川秀樹、佐藤春夫、丹羽文雄、菱山修三、柳田謙十郎、本田喜代治、太宰施門、福原麟太郎、芦田均、呉茂一、春山行夫、芹沢光治良、藤森成吉、鈴木大拙、中川善之助、太宰治、中谷宇吉郎、青野季吉、今日出海、林健太郎、恒藤恭、兒島喜久雄、瀧井孝作、火野葦平、須田国太郎、中村武羅夫、阿部知二、森田草平、田中耕太郎、北川桃雄、林巖、原隨園、織田作之助、北川冬彦、天野貞祐、大槻正男、片岡良一、宇野浩二、田辺元、上林暁、暉峻義等、舟橋聖一、中勘助、兼常清佐、吉屋信子、高坂正顯、高村光太郎、佐藤信衛、諸井三郎、三好達治、津村秀夫、神保光太郎、額原退蔵、亀井勝一郎、馬場恒吾、阿部次郎、近藤忠義、野田又夫の七十六氏。なお、初出誌は「昭和二十一年十二月二十五日印刷納本」「編輯人木村徳三」「発行人岡沢一夫」「発行所／東京都日本橋区通一丁目九白木屋内／鎌倉文庫」である。

同じ星・詩文芸雑誌／鱒・第一巻第一号・昭和二十二年一月一日発行・

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 文末に「昭和二十一年九月八日。」とある。初出誌奥付には、「鱒（第一号）」、表紙には「第一巻第一号」と印刷されている。なお、初出誌は、「昭和二十一年十二月二十日印刷」「編輯人宮崎譲」「発行人江藤正夫」「発行所／東京都世田谷区大原町一、二二三／赤絵書房」である。

新しい形の個人主義・月刊東奥・第九巻第一号、春季文芸特輯（第一輯）・昭和二十二年一月一日発行・3頁・「巻頭言」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌の、目次には、「巻頭言……太宰治」とあり、下山俊三「へんしゆうあとがき」には、「中央でそれぞれ第一線作家として活躍されてゐる、石坂洋次郎、板垣直子、太宰治、平田小六氏などからもあたたかい力添えを頂いた。」とある。なお、初出誌は、「昭和二十一年十二月廿五日印刷納本」「編輯兼発行人下山富吉」「発行所／青森市大野字長島三ノ二／東奥日報社」である。

織田君の死・東京新聞・第一五五八号・昭和二十二年一月十三日発行・2面・「文化」欄

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文

収載された。

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 小野稔「太宰さん私感」（『作家』第五号、昭和二十三年八月一日）には、つぎのように記されている。

太宰さんは、先に昇天した織田作之助を悼んで、／「織田君は死ぬ気でゐたのである。しかし、織田君の哀しさを、私はたいいていの人よりもはるかに深く感知してゐたつもりであつた。はじめて彼と銀座で逢ひ、なんてまあ哀しい男だらう、と思ひ、私もつらくてかなはなかつた。彼の行く手には、死の壁以外に何も無いのが、ありありと見える心地がしたからだ。こいつは死ぬ気だ。しかし、おれには、どう仕様もない。先輩らしい忠告なんて、いやらしい偽善だ。ただ、見てゐるより外は無い。」／太宰さん以外にたれも、これほど痛々しいまでの温かさを、織田君に注ぐことはできなかったかと思ふ。太宰さん自身、織田の形相に自己の死のかげをつかみとつたやうなものであつた。死の予言どころか、予言の復習までしなければならぬほど、太宰さんは、運命を彷徨した人だつた。

尾崎一雄「太宰君を憶ふ——愛読者として——」（『近代文学』第三巻第九号、昭和二十三年九月一日）には、つぎのように記されている。

織田作之助が死んだとき、太宰君は追悼記を書いて、「織田君、よくやつた」と結んでゐる。僕は、ちつともよくなんかやりはしなかつ

た、と太宰君に云った。すると太宰君は、「あれは、僕少し、感傷的になつてゐたもので——」と弁じてゐたが、しかし案外彼の本音だつたらうと今では思ふ。／「こはいことなんかない」と力み返つた十年前の太宰君。多分、最後まで「こはいことなんかない」と、心で叫びつづけてゐたのではあるまいか。

尾崎一雄「志賀文学と太宰文学」(『作品』第二号、昭和二十三年十一月十五日)には、つぎのように記されている。

太宰君の近況を一応きいてから、話は文学談風になつていつた。私は彼が書いた織田作之助追憶文のことを云ひ出し、その終りの方に、「織田君、よくやつた」と書かれてゐるのに不賛成の意を表した。あんな出鱈目をやつて、まるで自爆したやうなものだ、といふ意味を云つた。すると太宰君は、「あれは僕のセンチメンタリズムですよ、可哀そうだつたもんだから」と云つた。

〔付記〕 新仮名遣。

あとがき・猿面冠者(現代文学選23)・鎌倉文庫・昭和二十二年一月二十日発行・289～290頁

『太宰治全集第十卷』(筑摩書房、昭和三十一年七月二十日)に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「昭和二十年冬。」「津軽の生家に於いて、／太宰治」とある。

母・新潮・三月号、春季小説特輯、第四十四卷第三号・昭和二十二年三月一日発行・18～28頁・「春季小説特輯」欄

『ヴィヨンの妻』(筑摩書房、昭和二十二年八月五日)に、全文収載

された。

『太宰治全集第十三卷ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕 青野季吉、伊藤整、中野好夫「創作合評会②」(『群像』第二巻第五号、昭和二十二年五月一日)には、つぎのように記されている。

青野 あの人(小説)のうまい人ですよ……。太宰君の「母」(新潮三月)、これはどうですか。／伊藤 同じですね。いつもの太宰君の面白さですね。太宰君の小説は——僕はついぶん読み落してはいるが、近時のあの人(小説)は皆書き方が一定して、きちんと一つのところへ落ちるようになっていきます。もし長篇小説を書いたらどういう態度で書くかという興味はありますけれども、短篇ではもう同じだな。やはり、嘘やつくりごとを書くけれども、それにどうして生命を与えるかということでも苦労しているらしい。だから僕らが面白がるところは、あの人にとつてはなんでもないもので、この途中へいく枕のようなどころを一生懸命書いている感じですね。だけれども雑誌で短い小説を書いていくとすれば、ああいう形にもつて行くことは非常に強力なことです。あれは当代の編集者の責ですよ。太宰君がああいう形の小説を幾つでも繰りかえして書くというところは……。／中野 落ちまであつてタツシヤなのですが、ただ一つ「深夜の酒宴」でいったことも関連するかも知れませんが、この作品で太宰氏は、しきりに地方文化の薄手なのを面白くヤユしている。現在現実の地方文化運動に関する限り、太宰氏に笑われて少しも差支えないが、しかし、真

面目に地方文化そのものの問題とか、その他この作者がよくカラカウ現在のいろんな社会の問題ですね。これはこの作者は、いつもニヒルに笑い去っているらしいが、実は、笑っているこの作者程度のニヒルそのものが、やはり、ここに笑われた地方文化程度に薄手なものであることに気づいているかしら。

〔付記〕 初出誌「編輯後記」には、つぎのように記されている。

さて本号では、谷崎氏の日記、秋艸道人の短歌のほか、稲垣、太宰、八木、舟橋、伊藤、坂口の諸家の小説を掲載することができた。読者諸兄に十分御満足して頂けると信じてゐる。(略) 御病氣のため暫く休載中であつた高見氏の「わが胸の底のここには」は来月号より再び続篇を頂けることになった。また太宰治氏は五月号から新しく長篇小説を起して下さる予定である。共に御期待を請ひたいと思ふ。

なお、初出誌は、「昭和二十二年三月一日印刷納本」「編輯兼発行者斎藤十一」「発行所／東京都牛込区矢来町七一／株式会社新潮社」で、「春季小説特輯」欄には、谷崎潤一郎「西行東行(日記)」、太宰治「母」、舟橋聖一「肉の火」、八木義徳「仏壇」、会津八一「盆梅(短歌)」、伊藤佐喜雄「裸祭り」、稲垣足穂「熊野」、坂口安吾「二十七歳」の諸作が掲載されている。

ヴィヨンの妻・展望・三月号、第十五号・昭和二十二年三月一日発行・92～115頁・「小説」欄

『ヴィヨンの妻』(筑摩書房、昭和二十二年八月五日)に、全文収載された。

『春の枯葉(戦後文学選4)』(鎌倉書房、昭和二十三年四月三十日)

に、全文収載された。

『水仙(文芸春秋選書4)』(文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日)に、全文収載された。

『日本小説代表作全集16昭和二十二年前半期』(小山書店、昭和二十三年八月十日)に、全文収載された。

『富嶽百景(日本文学選44)』(光文社、昭和二十三年十二月十日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕 郡山千冬「下の方から」(『新小説』第二巻第三号、昭和二十二年六月一日)には、つぎのように記されている。

犬も歩けばと云ふが、退屈犬なる僕も遂ひに傑作にぶつかった。展望四月号の太宰治「ヴィヨンの妻」である。僕は数年前、ひどい失恋をした時、高見順の小説で救はれたことがあつて、未だに感謝してゐるが、太宰のいはゆる「男には不幸だけがあるんです。いつも恐怖と戦つてゐるのです」の現在の僕にとつては、この作品は救ひの神様だった。「死にたくて仕様が無いんです」の僕は、この作品を読んで一寸死ぬのを止めようと思つてゐるところだ。謹んで太宰ヴィヨン先生に叩頭する者である。

青野季吉、伊藤整、中野好夫「創作合評会(3)」(『群像』第二巻第六号、昭和二十二年六月一日)には、つぎのように記されている。

中野 しかし太宰氏、石川淳氏などは才能はあるのですな。「ヴィヨンの妻」(展望)というのは終戦後出た太宰氏のものではやはり力

作というか……。／伊藤 僕は戯曲を除けば、大体読んでいますが、あの作品は、太宰君が戦後書いた小説の中では一番骨組のあるちゃんとした作品ではないかと思えますね。／中野 とにかく、嘘を最後まで押し通していつていますからね。／青野 僕は芸術を鑑賞家としてみるのだが、太宰君などをみるときに、やはり作家にもその悩みはあると思う。これを一般と特殊の関係としてみると、そういう一般との関係においてもごく特殊なものであればいいですが、特殊でなくて特異なものだという感じがすな。太宰君の場合にしても、ごく特異な人間の特異な芸術だという性格をもっていると思う。ところが鑑賞する方でも、芸術をつくる方でも、特異なものに対するおもしろさはある。しかしそれでは不満だというのが芸術在つて以来の大きな通則ではないかと思うすな。／中野 それが日本の文壇のつらいところじやないですか。つまり太宰氏みたいなああいう特異な芸術というものは、一人や二人くらいあつても、僕らがそう言わなくてもいいくらいに他方にそうでないものがあればいいのですが、日本では太宰君のような特異な変つた芸術が、うつかりすると日本の文壇ではまん中に坐らなければならぬというところに悲劇がある。／青野 そこに問題がある。たとえば日本の私小説など特異なものの一つですが、私小説家の中でも比較的特異というのみではない人もある。そういう人の私小説の方が多く発展してくる。最初からの私小説はおしまいです。つまり特異なものであつて、若干でもその特異を超えて特殊になるという努力をする。ところが太宰君の場合にはそうでなくて、ますます特異になつてゆくことによつて人々の興味にうつたえている。僕はその点

でいつも太宰君に不満をもつのですがね。／中野 しかし不満をもちながら、うまいなあと思つて最後まで楽に読めるというのはどういうことなんでしょうかね。実は私も「父」というのは、ずつとおもしろいなと思つて読めたが、さて何が書いてあつたかなという段になると、数日前のが思い出せない。そんなふうな妙なおもしろさではないかと思うですね。／伊藤 つまり太宰君なら太宰君という作家の存在がおもしろいので、その存在から出てくる変な蜜みたいな、ほんの切れつばしみたいなものがおもしろいので、切り離された作品として、誰でもなく書いたらどういふものかという、そういう限定されたおもしろさじやないかと思う。

和井慎「異端の文学」(『東北文学』第二巻第九号、昭和二十二年九月一日)には、つぎのように記されている。

坂口の文学、石川の小説、太宰の作品——この今をときめく三人の作家の文学を、敢て異端の文学と規定づけたく思ふ。異端の二字が好ましくなければ、特異の文学と言つてもよいが、しかし異端の文学と呼ぶことは毫も彼等の文学を低く評価することではないのである。むしろ異端の文学としてのあり方に於て、彼等の文学は弥が上に光り輝くのである。(略) 太宰治は「ロマネスク」や「道化の華」や「ダス・ゲマイネ」で文壇に新風を吹き入れた。それまでに、太宰は所謂オースドックスな文学を一生懸命に学んだのである。古今の名作をお手本にして、これが文学なのだ、と一意専心、優等生のやうに勉強した。そして既成文学に中毒してしまつた。自然主義、リアリズム、心理文学、描写術、レトリックの技巧——かうした様々の毒素が身体中に充

満して二退も三退もいなくなつた。かく進退窮つた彼が苦吟の末に得た啓示は「逆手」である。先づ毒素を排出することだが、そのまゝの形ではいけない、逆手だ。自然主義の手法の上に心理が胡坐をかき、リアリズムの形式でも話は架空な物語だ、描写すべきところをすかし、説明すべき個所に描写がのさばる。さうして少し照れながら、ほんの少しばかり心の奥底にメスをあてる。血が出る、一滴、また一滴。彼は内気である。もうそれ以上えぐれない。が、痛い、傷は傷である、自虐は自虐である。彼はその痛みに顔を顰めながら流れ出た血をペンに受けて、次々と書き綴つて来た。太宰治の文学とは、このやうな逆手と自虐を基盤としたものであつてみれば、作品の出来、不出来にムラが多いのは止むを得ない。逆手が効を奏した時、メスがよく研ぎすまされて手術の腕が冴えた時、人はよくもこんな傷ましい美しさがあるものだ、と感動する。戦後の仕事を見ても「嘘」「親友交歓」「父」「ヴィヨンの妻」等は何れも佳作であるし、どの作にもひやりとする深淵を覗かせてゐるかと思ふと、「男女同権」の如きアントン・ダザイツと改名を求めたいやうな失敗作（チエーホフの、煙草の害について、といふ独白劇を模して遙かに及ばない）や、「メリー・クリスマス」「母」などの僅かに平均点を稼いでゐるやうな作品もあつて、この作家は依然として、いつも端倪すべからざるものがある。「父」や「ヴィヨンの妻」で太宰の所謂「逆手」が奏効したのも、その裏に本手（リアリズム）がひそんでゐるからである。虚構と逆手の中にひらめく凄じい現実の切れつばし、白昼ふとした知り合ひの婦人と下らなく酔つて通る食糧営団の長い列の中に病む妻が背に幼児を横

に上の子と並んでゐるのを見る「父」——傷手は生々しく苦しい、そしてこの痛烈な自己批判はリアリズムの深淵による外はないことを太宰は会得してゐるのである。最近、太宰をデホルマシオンの文学と呼ぶやうだが、それは太宰自らが否定するやうに、私にも承認し得ないのはこの一点にかゝるからである。ヴィヨンのやうな放蕩無頼の夫の中に、太宰の自虐を見るのは、この「ヴィヨンの妻」といふ最近の文壇の収穫（太宰の文学の中でも重きをなす作品である）をよく理解したとは言へない。太宰の心の深奥で傷き、泣き、救ひを求めてゐる自虐精神はかの夫ではなくて「妻」の中に怖れを知らぬリアリズムで描き出されてゐることを知るべきである。だが——所詮は逆手、逆手はどこまで行つても逆手である。太宰治といふ特異な作家にのみ許されるこれはこれ異端の文学！

荒正人「オペティミズムの盲点」〔光〕第三巻第十号、昭和二十二年十月一日）には、つぎのように記されている。

織田作之助は「思へば私にとつて人生とは流転であり、淀の水車のくりかへす如くくり返される哀しさを人間の相と見て、その相をくりかへし書き続けて来た私もまた淀の水車の哀しさだつた。」（「世相」と述べ、思想にたいする消極的な不信を述べてゐる。かれの場合は、左翼敗退の時期、中日事変の頃に青春を経過したのであつた。また、坂口安吾は「私の青春は暗かつた。身を捧ぐべきよりどころのない暗さであつた。私は然し身を捧ぐべきよりどころを、サーカスの一座に空想しても、共産主義に空想することは、もはや全くなつてゐたのだ。」（「暗い青春」と、昭和初年の左翼全盛時代の青春を回想して

ある。——いづれもペンシズムである。「無尽灯」の石川淳、「ヴィヨンの妻」の太宰治、鳴海仙吉物をかいてゐる伊藤整、「わが胸の底のこゝには」の高見順など、どれもが、織田坂口の青春期のあひだで、それぞれの姿勢で、コムニニズムに接近したインテリゲンチヤのペンシズムである。かれらはおそらく、没落する地主階級、または、中間的な階級の下、降の記憶しかもたなかつたであろう。さういつたかれらが、ペンシズムを以て、青春造型を行つたことはきはめて自然のことではあるまいか。もちろん、コムニニズムに一直線にとびこんでいつたひともある。それは多くの場合敗残の苦渋をなめることとなつた。その理由はいくつかあらう。そのひとつは、かれがふさぎの虫をきはめて簡単に処理して、オブテイニズムを獲得したため、その復讐を蒙つたのではあるまいか。——死と虚無を自覚しないが故にコムニニストであるのではなく、死と虚無の絶望から立ちあがらうがために、それとたたかひ、それらを克服せんがためにコムニニストになつたといふひとびとが日本にはゐないのであらうか。

手塚富雄「『重き流れのなかに』と日本短詩の世界と」(「八雲」第二巻第九号、昭和二十二年十一月一日)には、つぎのように記されている。

椎名麟三氏の第二作「重き流れのなかに」(『展望』六月号)を読みへて、心は楽しさにはづんでゐた。その苦渋の作者の苦渋の作品から私の受けた反応はそれである。敗戦後の創作のうち私はその小部分を讀んでゐるだけだが、私の讀んだ限りにおいて、特にこちらの心の急所に触れて来たのは、井伏鱒二氏の「二つの話」「橋本屋」、太宰治

氏の「ヴィヨンの妻」その他の作である。これらの作は戦後の吾われの心内風景から生れたもので定型的な小説作法は問題とならず、この日本現勢のなかに作者が度胸を据ゑてどつかとあぐらをかいてゐるのである。今のわれわれの氣持から生れたものであるから作者と読者は共に悲しいが、悲しいことによつてまた楽しい。これらの作品がわれわれに与へる影響は、心を明かるくしてくれるのである。ところで、井伏、太宰両氏が、いはば小鬢の方からそして少なからぬ酒落氣をもつて表現したことを、椎名氏は、真向から、些の酒落氣もまぢへずに表現したのだ。だから戦後の日本の苦渋と悲しみは、ここに始めて本格的な文学的表現を得たといつていいのだ。

平田次三郎「現代の小説——時評風に——」(「三田文学」第二十一巻第十一号、昭和二十二年十一月一日)には、つぎのように記されている。さて、ここで僕は太宰治の小説について若干ノートをつくらうと思ふ。『父』と『ヴィヨンの妻』(『展望』三月号)には、いふまでもなく一聯の精神的紐帯が視はれる。『父』においては、「男性の哀しい弱点」をつくことから、人間の魂のうちにひそむ罪障をえぐりだし、その負ひ目の意識を追究することの激しさにうちまけてしまふ、人間の人間らしい卑小な存在を見きほめようとの意図をもつ。『ヴィヨンの妻』も同じこと、神を失つた人間が、その魂の安定の地をえられぬままに悪魔と手をつなぐ。この悪魔とのたたかひは、よそ目からみると醜惡邪道としか映らぬばかりか、かへつてまた、この罪におののく善良な魂のもだえを誤解してしまふ。この作品における極悪非道な夫の魂の苦しみと、その素朴な妻の苦しみとは、互になんのかかはり合ひもな

い。妻は男性のすべてを罪人とみ、罪なくして生きるものはひとりとしてない、との結論をえて、いはば人生に絶望し、そのあぐく手もなく、つまらぬ男の情慾の犠牲に供せられる。そしてその翌日、夫とあつたその時に、「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」と、全くもつて動物的本能をさらけだす。太宰治の精神は、この男も女も、おしなべて世のすべての人間の救ひがたい罪障に、はげしい絶望と虚無とをみてゐるのである。この観念的小説技法は、現実の人間存在や人間関係を極端にアブストラクトした上に、きはだつて心理的な側面で人間を追究するわけだが、そしてそれ故に、作家の観念構造外にある現実の問題は捨象されてしまふのだ。

だがしかし、この小説技法のよしあしはいま問はぬとして、ここに現された世界に関する限り、現代の人間存在の精神的状況への痛烈な批判をみとめることができるのである。それにしても、批判といふと多分に能動的な意見が含まれるので、太宰氏はむしろ能動的ではなく靜的に、諦観的に、人間の頹廢と没落の様相をみきはめ、みずからもそこから救はれぬ苦しさに、手をこまねいてゐると言つた方が適當だろう。太宰氏を以て代表される流派を、僕はニヒリズム派と称してゐるのだが、現代の小説にはこの派に属するものが多いのである。そしてまたこの派のヴァリエーションとして、日本的デカダンスやエロティシズムの系統があるわけで、これらに対しては文学の進歩派と、別に私小説派とがあるのである。この三派の性格は別の場所で比較的に詳しく書いたから、ここでは省くことにする。

小田切秀雄「中堅作家の職業意識―反省と建設(中)―」(『新大阪』

昭和二十三年一月十三日)には、つぎのように記されている。

これらの作家に対して太宰君が「ヴィヨンの妻」「斜陽」等をはじめとして衰えない制作力を示しているのは興味深い。たとえば「斜陽」についてみても、こんにちの時代の激動にゆずられて経済的に社会的に没落しはじめてゐる小市民の感傷を、たくみなおしやべりでしかも適度に、直接小市民の没落を描くのでなく、没落する貴族をとりあげるといううなひとひねりひねつた触れ方でくすぐるこの作家が、若い知的な読者たちの人氣の中心となつてゐるのは当然だろうが、この作家の傷つき易い感受性と純粹さとはもはや往年の「晩年」(太宰の最初の創作集)の時代と違つて、それによつて作者が傷ついたりよるめいたりせざるを得ないようなものでなく、かえつてそれ意識的に創作上のもつてにして才能を肥え太らせるようなものとなつてゐる。制作力が盛んなのはこのためだが、傷つき易い感受性や純粹さがこのような仕方で微妙に職業意識化されている事實は、才能のはなやかな回転だけによつてはやがて若い読者をもつなぎとめることのできぬ事態に立ち至るだろう。「ヴィヨンの妻」が日常性の秩序をはみ出してしまつた日本の小ヴィヨンをとり上げながら、結局その周りの「妻」だけを達者に描き出すことに終つていたことにもそれはいふがわかる。

八重垣邦夫「神に脅えるエピキュリアン」(『新樹』第十号「特輯太宰治論」昭和二十三年三月一日)には、つぎのように記されている。

戦後の作品を集めた短篇集『ヴィヨンの妻』(同名の短篇以下七篇)を読んで、ふと感得した太宰治の精神系譜について――。――この

まゝ別れては、私は永遠にこの男を恐怖と嫌悪の情だけで追憶するやうになるだろうと思ふと、彼のためにも私のためにもこんなつまらないことはない。一つだけでいい、何か楽しいなつかしい思ひ出になる言動を示してくれ。どうか別れ際に、かなしい声で津軽の民謡が何か歌つて私を涙ぐませてくれ。(親友交歓) しかし親友と自称する傲慢な相手の男は、無慙にも彼の願望を踏みにじつてしまふ。だが彼はその傲慢無礼、野蠻とも何とも言ひやうのない相手の小学校同窓生の前で、気弱く笑つて、自分のそんな願望をかへつて後悔してみたり、逆にいつそ裏切られたことを痛快がつてみたり……。要するに彼は根は善良至極のお人好しである。馬鹿正直な程善良である。ところがその善良さを正面切つて表現することが出来ないために奇妙な苦悶を露呈するのだ。さうした彼の泣き笑ひの表情を見て、彼は道化師であると合点することは、些か即断に過ぎる。／＼彼はいつも初恋の女と対決してゐるやうだ。お人好しの彼は勿論初心だ。ところが相手は玄人の年増女ときてゐるから始末が悪い。そこで彼は何時も相手から翻弄され勝で、戦々兢兢として只管平伏これつとめやうとする。そして心弱くふと相手の差し出した恋の毒酒を呑みほした挙句、われにもあらぬことを口走り、取返しのかね肉體關係を結んでハツと氣を取り直すが、時既に遅い。手にするのはヤケ酒、後悔の味は苦く咽喉を流れ落ちる……。恋の道行のロマンスなどは凡そ遠い夢物語にしかすぎない。彼の前に展開するものは苦渋に満ちた人生の深淵だけだ。／＼黄昏の後で訪れてくる暗い夜の世界で、彼は寒々とした孤独にゆきくれる。そんな場合心弱くお人好しのくせに、彼は双肌ぬいで仁王様のや

うに突つ立ち、さあ矢でも鉄砲でも持つてこいとうそぶく。その風態恰好は一寸見にはなか／＼どうして、堂に入つたものである。だが後から指一本触れただけでもんどりうつて転げてしまふのが内実。心底は所詮弱いのだ。そのもろさを自覚したとき、彼はそのやうな狂態を演じてゐる自分の姿が恥づかしくなり、氣が触れたやうに冗舌になる。喋りまくつてゐれば氣がまぎれやうとの寸法なのだ。しかしこの世は甘くは出来てゐない。やがて喋り疲れた彼は、自分がどうにも足掻きのとれぬ深淵に陥ち入つてゐることを自覚せずにはゐられない。最早や恋人との対決は彼岸の物語めいて……。孤独の影に脅える哀れな人間があるだけだ。／＼孤独の道にゆきくれ、孤独の影に脅える彼は、何時の間にか体が傷だらけになつてしまふ。傷ついた彼はこの傷を癒やしてくれるあるものを求めて放浪の旅に出る。その行路は勿論棘々しい茨の道だ。彼にあつてはその茨は、『地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合ひ』である。彼は茨の棘に刺されて痛い／＼と悲鳴を挙げつゝもなほ旅を続けなければならない。妻子が病苦と飢餓に瀕してゐても家の事を省りみる事が出来ない。『炉辺がこわくてならない』のだ。そのため葛西善藏ならばさしづめこの世の業とでも言ふであらう悲惨な場面が往々に繰り返されるのだ。／＼そのやうな悲痛な旅を、彼は『義のために遊ぶ』と名付ける。そして彼はそつとつぎのやうに独言やいてみせる。——私の胸の奥の白絹に、何やら細かい文字が一杯に書き記されてゐる。その文字は何であるか、私にもはつきり読めない。たとへば十四の蟻が墨汁の海から這ひ上つて、さうして白絹の上をかさかさとし小さい音を立てゝ歩き

廻り、何やらこまかく細く墨の足跡を画き印し散らしたみたい、そんな具合の幽かなくすぐつたい文字、その文字が全部判読出来たならば、私の立場の『義』の意味も明白に皆に説明できるやうな気がするのだけれども、それがなかなかやゝこしくむづかしいのである。……花開く時節が来なければ、それははつきりと説明出来ないもののやうである。(父)と、では花開く時節が来るであらうか。彼にはくるともこないとも言ひ切れない。その時節に廻り合はす事が出来やしないかと、はかない一縷の望みにすがつてゐるだけだ。若しその望みさへも奪つたならば、彼には最早や死があるだけだ。彼の本心は死にたくはない。それでゐて彼は、——僕はね、死にたくて仕様がないうです。生れた時から死ぬ事ばかり考へてゐたんです。……へんなこはい神様みたいなものが僕の死ぬことをひき止めるんです。(父)と、だだをこねる。それは詭弁のやうであるが、彼の内奥に於ては決して詭弁ではないのである。ましてや錯覚や心理の倒錯でも無い。／傷つき倒れ、それでもなお喘ぎ／這つてゐる哀れな彼は、そのやうなわが身の運命にふと神から与へられた罪を莫然と意識するのだ。所謂原罪とも言ふべきその罪の意識に心弱い彼は神の存在をこわいものと思ひこんで、贖罪の方途を考へてみるのだが、所詮彼にはそんな殊勝な事の出来やう筈はない。止むなくこわい神様の前に訳もなく脅えてゐるだけ……つまり彼は『神に脅えるエビキュリアン』である。／だがその実、神なるものが実在してゐるかどうか、彼自身にもよく分つてゐないのである。——おそろしいのは、この世の中の何処かに神があるといふ事なんです。ゐるんでせうね？(ヴィヨンの妻)と、彼は神

の存在に疑問符を附してゐる。それでゐて何か恐ろしいものを感じずにはゐられないのだ。／そのやうな恐怖感を内包しながら、駄々子のように泣いたりわめいたり、道化師のやうにおどけてみたりしながら世俗に対する逆襲戦を展開してゆく酔ひどれの反逆児——そのシルエットに焦点を据えたとき太宰治の秘密が躍如として浮彫されてくる。／『ヴィヨンの妻』は氏の全作品中の傑作の一つとなるであらう。この作品で氏の精神的苦悩(作家的苦悩)は妖しい程の光芒を放つてゐるから——。だがこゝで私が氏に望みたいことは、神経や観念が感傷と手を結んで生れたベールに作者自身が一人よがりの陶醉感を覚えて、次の飛躍へのスプリングボードまで自分をひきずり出すことを忘却しないで欲しいことだ。更に言ふならば、神経や観念の濫費も結構だが、今一つ重厚な肉体感が、強烈な作家的苦悩に裏打されて打出されんことを望みたい。それは何も今流行のエクジスタンシアリズムを身につけよといふのではない。どつしりとあくどい程の体臭を匂はせて欲しいことだ。(二三、一、一〇)

高見順「文芸時評」(『文学者の運命』中央公論社、昭和二十三年三月二十五日、初出未詳)には、つぎのように記されている。

太宰治は現文学における大切な作家のひとりである。「冬の火花」「春の枯葉」で人間の心の深淵をのぞきかけた彼が、「父」(人間)のやうなベラツクを見せるのは残念である。手際の良さが却つて悲しい。「ヴィヨンの妻」(展望)にも冒険の戦慄が無い。佳作には相違ないが、お家の芸的安易さである。太宰ならではの深淵的なものをのぞかせはするが、それを安直に売つてゐる。書ける人なのだ。日本文学

の為にどつしりとした仕事をしてほしい。

大井広介「六号文芸時評」(『風雪』第二巻第四号、昭和二十三年四月一日)には、つぎのように記されている。

△三〇枚の恰好をつけるのには日記的随筆的身辺雑記的私小説はもつてこいか知れない。それを小説で候のと、良心が許さないとすると、知恵と工夫が要る。坂口安吾の所謂戯作者精神、読者へサービスする才能が要る。二〇枚ぐらゐのおとし噺では太宰治が飛抜けて巧い、『犯人』(『中央公論』一月号)などがさうだ。坂口が戯作者で、太宰が一口噺の大家に尽きるなら論外だ。『花妖』をかき『ヴィヨンの妻』をかくから坂口、太宰なんだ。始終『花妖』をかき『ヴィヨンの妻』をかくわけにもゆかぬ。二〇枚には二〇枚がとこサービスして、その原稿料でマーケットからカストリを仕込み元気づけて『花妖』をかき『ヴィヨンの妻』をかく、それでよろしい、二〇枚三〇枚で小説の実を尽すことは不可能だと俺は考へてゐる』

杉浦明平「太宰治氏へー公開書簡」(『新生』五月号、昭和二十三年五月一日)には、つぎのように記されている。

井伏先生は「佗助」以下きわだつてヒューマニスティックな色合いを濃くしみ出させ、「橋本屋」のあわれな家族など、亡びてゆく以外にないことを見透しながらいたわつてゐるのに、貴下は自分以外をあわれむことを知らぬエビキュリアン。だから井伏先生の小説には、心からの悪党が出て来られないのに、貴下は自分(たとえば女生徒)のほかは、或は自分も含めて、みんないやな自嘲の色にぬりまくる。もちろんそれは貴下の文学が劣つてゐるという意味ではございません。た

だ、御兩人は、ふざけたときにするお地藏さんというおつぼのように背中合せになつてゐるというだけのことです。そして「猿面冠者」や「二十世紀旗手」のばあい、形式にもつかず内容にもつかずもつてゐた「私」でもなく「彼」でもない人間が、最近では「私」から遊離して幾人かの人物の中に形象化され、「ヴィヨンの妻」の大谷のように若干「神の裁き」をさえ受けさせられるに至つたけれど、やはり小生はいつまでもこのように酒と女にしか目の向かないヒーローを余り好きじゃない、いやなやつだ、と思うのです。／＼というものの貴下の最近の作品「ヴィヨンの妻」にしろ「斜陽」にしろ、そこらの作品はもとより、貴下自身の若いころの自己破壊をこころみたりがたりとちがつて、芸術的な造型化という点では類なくすぐれてゐることを否定するわけにはゆきません。そしてここに小生は貴下の宿命を見るのです。貴下だけではなく、芭蕉とか西鶴とかあるいは鴈外先生までも含めてもいいかもしれません日本の文学の宿命を感じるのです。もつとも貴下がナポレオンやヒットラーと同じように宿命感につかれてゐる或は自覚してゐることを花田が指摘してゐるのを読んだことがあります。それが、それとは少しちがうように思います。というのは日本の文学者はたたかに敗れたときのみ芸術的勝利を打樹てゐるという宿命のことです。貴下の中では、長い間、近代小説が日本的な非近代性に挑戦してゐた、貴下の浪漫的なたたかいの仕方は独逸浪漫派と同じく敗北を約束してゐたとはいへ、戦争中も日本精神の潮の中でねばり強く抵抗をつづけてゐたのをわれわれは見ました。がその間の作品はたたかいのみだれをそのままであるか、パロディの殻を固くかぶつてい

るか、いずれにせよ、芸術的な青さをまのがれなかつたのに、今日日
本的な力に降伏してしまつたとき、はじめていくつかの完成をなしと
げたのです。／「天皇陛下をお愛し申し上げていた」などというの
は文学者として自ら文学精神を汚すものというそしりをまぬがれえま
せん。吉屋信子さんや亀井勝一郎氏のように女学生のお涙を頂戴して
生きているものにだけふさわしい文句です。これ以上愚にもつかぬ文
句は今いくら頭をしぼつてもとても考えつかないでしょう。それを反
語でなしに言い切るのは、やはり何かのお伽草子のパロディでないか
ぎり、文学とは縁がないとは思いませんか。／そのように完全に敗北
したときに至つて、はじめて芸術的形象を定著せしめたなど、何と
いう悲しい宿命でしょう。貴下が「斜陽」や「ヴィヨンの妻」の女に一筋
光を投げかけているのにだまされる人もあるかもしれないが、実は貴
下は平凡につきまり日本的諦観をもつて日本的日常性の中に生きている
女だけにしか希望を与えていないことはたしかです。男の方はみんな
亡びることを希つているのでしよう。実際天皇陛下など蹴飛ばそうと
いう男でなくてはもはや今日の粗い空氣に耐えないでしょうからそれ
ももつともです。もちろんそういう不敬な人間は決して皆無ではありません。
目下たぎるるつばのうちで相当多く生成中です。もつともそ
ういう男はおでん屋やバーなどは若干性質のちがつた場所にいるか
ら、貴下にはつかまえていくかもしれません。／小生は、貴下が日本
文学の宿命を打ちやぶつて二つの勝利をもつて文学的生涯を結ぶこと
を希望したいのです。があまり当てにしているわけはありません。
しかしせつかく手紙を差上げるのだから、やはり最後に、ヒロポン代

りに文章を書く夜のために処方箋を一片進呈しておいてもあなたが礼
を失するばかりではありませんまい。／「文学はまず内と外との天皇制
打倒から」／「内と外との」などいうすこぶるアツプ・ツウ・デイト
な句まで盛り込んであります。もし氣に入つたら座右銘とするの榮を
賜わらんことを。

福田恆存「道化の文学（承前）——太宰治について——」（『群像』第三
巻第七号、昭和二十三年七月一日）には、つぎのように記されている。
仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしま
せん。人がいいと言へば、よくなるし、悪いと言へば、悪くなるん
です。ちやうど吐きいきと、引くいきみたいなのです。おそろしいの
はね。この世の中の、どこかに神がある、といふ事なんです。あるん
でせうね？（『ヴィヨンの妻』）／しかし、だまされてはいけません。「仕
事なんてものは、なんでもないんです」とはよくいった。「ヴィヨ
ンの妻」の書きだしの一頁、それからその夜中にかへつてきた夫が
ジャックナイフを右手に、「大きい鴉のやうに二重廻しの袖をひるが
へして」するりと戸外に飛びだすところ、まさに小説のうまみとはか
ういふところだ、といへば、作者はおもしろくない顔をしようが、や
はり悪魔の凄惨な寂しさをこれほど軽く、のみならず楽しくすら描写
しうるといふのは、なみたいていの心がまへではない。家庭の幸福は
悪徳によつて、徳は罪によつて保証されるといつたが、これだけにひ
とを信ぜしめる作品の真実は、作者の生活の虚構によつて保証され
る、とつけくはへれば、さきほどからぼくのいはうとしていひたりな
かつた真意を諒解してもらへようか。

平田次三郎「中堅作家論(上)」―太宰・丹羽・石川淳・井伏―(『新大阪』昭和二十三年七月二十二日)には、つぎのように記されている。

太宰治が今日浴びている注目のみなもとは何処にあるのか? 「春の枯葉」「冬の花火」から『ヴィヨンの妻』『斜陽』に至る作品系列をたずねてみて、いわばその人気の出所を明らかにすることが必要である。／私見によれば、それは太宰治の文学が、今日の人々の魂の奥底の声に火をつけているところに成立しているのだ。『ヴィヨンの妻』

「斜陽」において描出された現代人の苦悩が、読者の魂の何ものかと照応しているのだ。太宰治が自己の人間の責務において探究せざるをえない、そしてそこで見出さざるをえなかつた人間の根源的な罪過ともいうべきものに、読者は自己の精神のそれへの照応を見出すのである。そして、そこで苦悶する人間の中に、自己の姿を見るときに、それによつて自分が人生について真実な省察をすべく誘われるのである。もちろん、これは太宰治の文学の基礎的ことからであり、読者の反響のすべてが、この基礎的なものとどまるわけではない。そこにはいくつかの階層があり、全的肯定から全的否定にまでおよんでいるのである。いま、太宰文学を全的に否定しようとする読者についてはふれぬ。そのような否定の理由には、なんら僕らを納得せしめるものがないからである。／こうした基礎的な共感と評価の上に、部分否定的なものを感じているのが、いわば高級な読者であり、その代表としての批評家である。これらの読者は、太宰氏の「羞かみ」がその文学を必要以上に歪めているといい、その「観念的手法」が作品の現実感を削ぐといい、その「反俗の精神」がマンネリズムにおちいつたがた

めに通俗的になつていい、そのデカダンス、そのペシミズムにこびている点で不健康であるという。こうした批判はすくなくらず正確に、太宰治の弱点を衝くものであり、僕もまた同感である。しかし、太宰氏がその文学の根源に敵として確保している人間悪への痛烈な対決に、現代人の良心とそれゆえの苦悩をみるのが可能である点で、後代の作家の指標となることは否定できぬのである。

臼井吉見「太宰治論」(『展望』第三十二号、昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

敗戦後のおびただしい仕事のなかで、特に注目すべきものは『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』の三篇であらう。渾然たる結晶を示している点からいへば、『ヴィヨンの妻』を挙げねばなるまい。傷つきやすい心をもつて生れたために、ゆゑ知らぬ不安におびえて巷を彷徨する、のんだくれの薄汚れた詩人の身上について、決して傷つくことのない、冷酷無惨な現実家であるその妻の口を通して語るといふ構想であるが、一種冷たい戦慄の美ともいふべきものを創り出してゐる。

平林たい子「脆弱な花」(『芸術』第七卷第二号「太宰治追悼」昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

私は太宰氏については、長い問文壇を遠ざかつてゐたからこの頃の小説しか知らないし、身辺の事情も小説で想像するだけである。それなのに、その二三行の記事を見ただけで、氏の死は恋愛よりも芸術の方の圧力で行はれたと直感して疑はなかつた。芸術の喜びと苦しみと悲しみを知つてゐる者には、恋愛はとうてい芸術以上の支配力ではあり得ない。恋愛のためには死ねなくとも芸術への失恋では、芸術家は

惜しみなく死ねるのだ。／＼しかし、「ヴィヨンの妻」以来一つの方向をはっきり握った太宰氏が、芥川龍之介のやうな芸術の行詰まりに当面してゐたとは思へない。「人間失格」などどんなにか作家に希望を点じた筈の作品であつた。結局太宰氏の気持はわからないといふほかない。山沢種樹「アヴァン・ギャルドの宿命」(『東北文学』第三卷第八号「追想の太宰治特集」昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

織田作之助は、戦後のジャーナリズムの最初の犠牲者であつた。織田作の死をきいて、太宰治は「おれは五番目ぐらゐに殺されるかな」と冗談を言つたことがあるさうである。だが、彼は旅立ちを急いだ。ミューズの神の祭壇への、第二の犠牲^{いけにえ}として自らを選んだ。敢て、ジャーナリズムの被害者と呼ばない。さう言つてもいゝかも知れないのだ。だが、さう言ふことは、尠くとも太宰的ではない。／＼流行作家、人気作家の列に入れられた太宰治は、しかし、よく耐へて、次々と佳品を生んでいつた。中でも、「ヴィヨンの妻」のごときは、太宰文学の中で、初期の「ロマネスク」「虚構の彷徨」、中期の「富嶽百景」と共に、彼の傑作と称してはゞからない。「斜陽」「人間失格」がライフ・ワークであつたことも、今はむしろ祝福すべきである。

板垣直子「太宰治の文学」(『月刊東奥』第十卷第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日)には、つぎのように記されている。

客観的な作風は太平洋戦争後にも、『ヴィヨンの妻』や『斜陽』にまで飛躍した。その頃になると、太宰の創作態度も真剣に本格化していつて、彼の文学としては頂点に上りつつあつたと思われる。丁度い

わゆる戦後の有能な新興作家達が、暗い深刻な敗戦国の現実を描いていかに生きるべきかの問題をそのなかにかけてでき、そういうリズムが重心になりつつある時期に、太宰の内にも芸術上の悶えのなかつた筈はない。

沙和宋一「性得の宿命——『晩年』へつながる純潔——」(『月刊東奥』第十卷第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日)には、つぎのよう記されている。

『ヴィヨンの妻』や『斜陽』で、太宰は私達誰もがまぬがれなかつた戦時の重圧下の喘ぎを道化と逆説とあるいは戯作による韜晦でしのいだ境地から処女作『晩年』の境地にかえつて本腰に踏みだした観があつたが、読んだ直後の私の印象では、『晩年』の純粹さそのままは受け取れなかつた。この作品にころりと参れば、太宰は読者に済まないような気がするだらうと思つたからである。流行のことばでいえば、アルチザンというやつが、どこかで作品を濁しているものがあると邪推した。いや、邪推ではないかと、ふと、ぎくりしたのは、そのあとで彼の親戚にあたる小館保氏から、太宰の、くらい、鬼氣迫るようなさいきんの生活の実態を聞いた瞬間であつた。

小田切進「太宰治の死とその文学」(『文学時標』第五号、昭和二十三年八月二十五日)には、つぎのように記されている。

『ヴィヨンの妻』は、「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ」と、世俗のモラルをはみ出した「神におびえるエピソード」を嘲笑していながら、「生きてゐさへすればいい」その「妻」だけしかが描きえず、また「斜陽」では没落する小

市民の感傷と絶望とを、達者なことばで飾りたて華麗に組みたてあげはしたが、そしてその感傷がいかに華麗な色彩によつて文壇や若い知的読者たちの喝采をうけることになると、「美と純粹」によりかかつてもつばら手のこんだ目新しい装いをこらしてつくり出されるに過ぎない本質上のマンネリズムから、もはや容易に抜け出られうるものではなく、その苦渋の色はさらに暗澹たるものとならざるをえないでいる。

〔付記〕 初出誌「編輯後記」には、「小説『ヴィヨンの妻』は敗戦後に於けるこの作者の最大の力作であり、佳作であらうと思ふ。」とある。なお、初出誌は「昭和二十二年二月二十五日印刷納本」「編輯者 臼井吉見」「発行者 江口寿恵男」「発行所／東京都文京区本郷台町九／筑摩書房」で、「小説」欄には、太宰治「ヴィヨンの妻」だけが掲載されている。

無題（マタイ六章）・蘭夢抄・昭森社・昭和二十二年三月十日発行・4頁

〔付記〕 「目次」には「無題（マタイ六章）……太宰治……4」とあり、四頁に無題で「太宰治」の署名の下に本文を掲げ、末尾に「―マタイ六章」と付記している。太宰治の文章というより、聖書の一節を引用したというべきもの。

父・人間・四月号、第二巻第四号、昭和二十二年四月一日発行・33～43頁・「創作」欄

『ヴィヨンの妻』（筑摩書房、昭和二十二年八月五日）に、全文収載された。

『春の枯葉（戦後文学選4）』（鎌倉書房、昭和二十三年四月三十日）に、全文収載された。

『水仙（文芸春秋選書4）』（文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』（八雲書店、昭和二十四年四月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 石川達三「自嘲小説―六号雑誌」（『文学界』第十巻復刊号、昭和二十二年六月二十日）には、つぎのように記されている。

（人間）誌四号をひらいて石川淳氏「いすかのほし」を読み、つゞいて太宰治氏「父」を読みはじめて、私は壁につきあたった。何かしら喉の奥に痰がひつかゝつたやうで甚だ気色がわるい。石川、太宰君に文句を言ふつもりではないが、ちやうど発表されたところだから引きあひに出させて貰ふ。／作家の自嘲と言ふか自虐と言ふか、それとも自己卑下、自己反省、……何と称してもかまはないが、かういふ小説――といふよりも小説家の態度が我慢ならなくなつた。この種の自嘲的小説は明治大正以来ずっと書かれてゐる。外国文学にも二三の実例はあるだらう。しかしこれはボードレールのニヒリズムでもないしバーナード・ショウの皮肉でもない。私はファウストを引っぱり出して見た。／（はてさて己は哲学も、法学も、医学も、あらずもがなの神学も、熱心に勉強して、底の底まで研究した。さうしてこゝにかうしてゐる。気の毒な、馬鹿な俺だな。……）／ところがあと十行も読んでみるとまるでケタが違つてゐた。／一体この自嘲小説なるものは作家の自虐趣味なのか、それとも一種の虚栄なのか。いづれにせよ

はや古臭いマンネリズムで、悪臭紛々たるものだ。誠実な反省のやうに見えて実は不誠実極まるもの、怠惰なる雑文ではなからうか。私にはどうも、作者自身が寝ころんで唾をはきながら悪態をついてゐるものやうに思はれる。自分を軽蔑するよりも文学を侮辱し、読者を侮辱してゐるやうに見える。それは作者自身の（実存）の姿だといふかも知れない。しかし決して文学の（実存）の姿ではないのだ。島木健作は生涯かういふ作品を書かなかつた。森鷗外もアナトオル・フランスも書かなかつた。なぜ彼等は書かなかつたか。それを私は考へる。かういふ小説ばかり書いてゐる作家と、かういふ小説を一つも書かない作家とを、しやんと比べて見たいのだ。そこから何か結論が出て来るだらう。／私は理路整然とかういふ事を論じ尽す才能をもたない。その辺は評論家亀井勝一郎君の見解を聞いてみたい。／日本の作家は、かういふ自嘲的小説を、何かしら誠実な作家的態度であるかの如くに盲信し、珍重する奇癖をもつてゐるやうだ。この奇癖はどこから生れたものなのか。よくわからないが、わからないまゝに腹が立つのである。

無署名「一頁アラベスク」（『新小説』第二巻第四号、昭和二十二年八月一日）には、つぎのように記されている。

「文学界」復刊号で石川達三が、石川淳、太宰治の作品を引あひに出して、「一体この自嘲小説なるものは作家の自虐趣味なのか、それとも一種の虚栄なのか。いづれにせよはや古臭いマンネリズムで、悪臭紛々たるものだ」ときめつけてゐる。この一瞥不誠実きはまるポーズ、自分を軽蔑するよりも文学を侮辱してゐるかの如き態度、これ

は石川達三のやうな人からみれば、「よくわからないが、わからないまゝに腹が立つ」のも無理はない。しかし、こんにち、単なる作家の表面の趣味で、かゝる悪態小説があらはれて、意外の支持をうけてゐるわけではないのだ。このやりきれない敗戦国の現実を従来の小説形式の中にはめ込まうとすること、そのこと自体に石川淳や太宰治はやりきれなくなつてゐるのだ。すなはち、これは石川達三や丹羽文雄のすでにおさまりがへつた、安定した、幸福な家庭生活と、石川淳や太宰治や坂口安吾の飲んだくれのその日ぐらしの相違であり、この平行線は永遠に交はらぬ。問題は、新人たちが、どちらのコースをえらぶかである。そして、後者をえらんだ新人各々の資質と世代的眼が、自嘲小説を飛躍させ、新しき自我形成の作品を生み出すならば、これまた大いに慶賀すべきことではないか。

伊馬春部「美しき犠牲を―太宰治を悲しむ」（『新小説』第三巻第八号、昭和二十三年八月一日）には、つぎのように記されている。

それから『父』にも、発表当時から私の心にぐさと刺さつてゐて、彼にもあんな悲しいことはもう書いてくれるなど言つてやつた、一節がある。すこし長いが、この場合どうしても引用せずにはゐられない。／私さへゐなかつたら、すくなくとも私の周囲の者たちが、平安に、落ちつくやうになるのではあるまいか。（略）つまらんものを書いて、佳作だの何だのと、軽薄におだてられたいばかりに、身内の者の寿命をちぢめるとは、憎みても余りある極悪人ではないか。死ね！／このやうな哀しい反省が、彼にはつきまとつてゐたのである。「親が有るから子は育たぬ」だの「子供より親が大事だ」と矛盾をたの

しむやうなことはせず、なぜもつと徹底的に犠牲をつくる心になつてくれなかつたらうか。一人の人間が太陽の如く輝くかげには、そのための犠牲がゐてもいいではないか。むしろそれは当然なのだ。そしてそれらの犠牲たちは、その人間が太陽の如く輝けば輝くほど、ひそやかに誇りあひ、犠牲たちそのものも、美しくかゞやいてくるに違ひないのである。／彼はもつと大胆に、顧慮なく、多くの美しき犠牲者たちをつくるべきであつた。さうして彼も、もつともつと偉大になるべきであつた。／私はかう痛恨するとともに、彼をしてこのやうに自己をさいなむに到らしめた、旧道徳を憎むものである。その、それこそ封建的ともいつてよい旧時代の道徳観念は、仕事部屋を他所に設けなくともすむくらゐの安住の家をすらこの作家に与へることを阻んでゐたのである。／そしてこのことこそが彼の悲劇の最大の原因であつたやうに、私は考へる。／（七・四）

竹山道雄「義」（『芸術』第七卷第二号、昭和二十三年八月一日）には、つぎのように記されている。

「父はどこかで、義のために遊んでゐる。地獄の思いで遊んでいる。いのちを賭けて遊んでいる。」／太宰氏は「父」という短篇の中でこう書いている。この異様な苦悩について、私の感ずることを記してみようと思ふのである。／作者はその先で次のように書いている。「……私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれてゐる。その文字は何であるか、私にもはつきり読めない。たとへば、十四の蟻が墨汁の海から這ひ上つて、さうして白絹の上をかきかきと小さい音をたてて歩き廻り、何やらこまかく、ほそく、黒の足跡を多

がき印し散らしたみたいだ、そんな工合の、幽かな、くすぐつたい文字、その文字が全部判読できたならば、私の立場の『義』の意味も、明白に説明できるやうな気がするのだけれども、それがなかなかやこしく、むつかしいのである。／こんな譬喻を用ゐて、私はごまかさうとしているのでは決してない。その文字を具体的に説明して聞かせるのは、むづかしいのみならず危険なのだ。云々」／いま私はあえてこの文字の判読をこころみようと思うのだけれども、それはむづかしいのみならず危険であり、おそらくは「鼻持ちならぬキザな虚栄の詠嘆」または「図々しい詭弁」であるだろう。それでもなおこれをしてみようと思ふのは、太宰文学が訴えるところのものがふしぎに普遍的であつて、私の心の底の傷をもつつくからである。私は平板単調の小市民生活をおくつていて、「義のため」にはもとより、「遊び」らしいこともしたことがないが、この文学はこういう私と同じような境涯の多くの人々にも戦きをつたえている。／かつて、まごころのために遊ぶ、と説くらしい文学が書かれたことがあつたが、私はあの「まごころ」には反撥を感じた。あれは、自分の欲望を解放する、その解放の仕方において自分以外の何者にもきかぬ、というほどのことと思われ、主として家の制約への反撥という限界の中のものであつた。したがつて、一たびその制約を脱して自分が家の主となると、今度はその潔癖や神経は横暴なお殿様ぶりを発揮することとなる。——たとへみずから高しとしても、卑俗な感じはまぬかれず、それは市民生活の動揺の一挿話にすぎなかつた。／しかるに「義」は、それを裏づける感受性と共に、まごころの文学よりもはるかに深いものをもつてい

る。それは靈性の逆説的な呻き声である。この靈性はつねに絶対者への郷愁になやみながら、しかもそれをどこにも発見することができない。そして「まごころ」のように自己の欲望の中に大あぐらをかいてそこに安住することができず、むしろそれを毒のある麻痺剤として常用して、生の恐怖からのがれるようすがとっている。彼の感受性と時代精神がそうさせるのである。／彼の感受性の前には、いかなる絶対の、安固の、それ自身で実質をもつて存立するものはない。たとえば、「新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊がのろろ這つて歩いてゐるのを見た。石が這つて歩いているな、たださう思つてゐた」しかし、その石塊は子供が糸で結んで引ずつてゐるのだつた。すなわち、この人にとつては、石は固着したものだという普通の先入的知覚はない。彼の知覚はすべての既成の形態を溶解させ崩壊させてしまうので、彼はそれを手がかりにして建設すべき何物をも捉えることができない。彼は二歳のときに発狂した。そしてさまざまの幻を見た。この発狂はまもなく癒えた。大人は誰もそれを知らなかつた。このとき以来、彼の感受性という写真機はそのレンズも乾板もきわめて精巧であるが、現像してみると、そこに定着された像は普通の輪廓をもつていないで、むしろその像の部分の空白を鮮明に印するものとなつた。風の中にとぶ白い蝶は、太宰流にいえば、蝶がとんでいるのではなく、蝶の形をした空白がとんでいるのである。これは、ロカタンが見た嘔吐の世界と通ずるものがあるが、もつと濁りがなく、観念の重みがなく、するどくすぎ透つている。／こうした知覚を生む主体精神の危機のおそろしさが、人を戦慄させる。これはただ、いかなる集中し統一

する意欲をも欠いて、内面の空洞の中へと解体にひんしている者のみがある。客観世界においても人間関係においても、その間隙の空白ばかりがくつきりと映しだされる。そして、この空白は美しく、人を吸引する魅力をもつてゐる。それは、断崖の上にはりわたした一条の綱を歩いてゆく人を見るときのような、いわばアクロバチックな悲痛な魅力である。／このような感受性をもつた人が普通の堅実な生活をおくらなかつたことは当然である。すべてただ作品から推すだけであるが、彼の苦悩の多い生活は詩神にささげるいけにえだつたのである。／詩神は彼にささやいたのであつたらう——「そのような感受性をもつてゐる以上、なんじは人生において一切の目標をもつな。価値をもつな。なんじには積極的に建設的に情熱を集中すべきものが何もない。現代にあつて人々が熱中しているものは、あれはすべて平凡な乾板にうつた世界の像である。なんじは何物にも酔つてゐることはゆるされぬ。なんじにゆるされた唯一の集中は、ただその感受性の表現だけだが、それが何のためであるかは知ることはできない。もし酔つていたいなら、ただアルコールの助けをかりて脳細胞を麻痺させよ——」

木室浩「臼井吉見氏の太宰治論を駁す」(『時代』第三卷第九号「特輯太宰治論批判」昭和二十三年九月一日)には、つぎのように記されている。

私などが、何のうらみもない臼井氏などに、くつてかかるといふのも、太宰氏が晩年の作「父」において書いてゐられる、「義」のため

にはかならないのである。さうでなければ、貴重な紙面などつぶさないで、臼井氏をたづねて教へをこふなり、膝づめ談判するなり、ことは当事者だけのあひだですむはずであるが、さういかぬところに、「義」が、敵として、あるのである。／＼妙なこと、わかりきったことをいふやうであるが、私はこの一文を、臼井氏よりも、読者にむかつて、かたらねばならないのである。

〔付記〕 初出誌は「昭和二十二年三月二十五日印刷納本」「編集人木村徳三」「発行人岡沢一夫」「発行所／東京都中央区日本橋茅場町一ノ二〇／株式会社鎌倉文庫」で、同誌「創作」欄には、平林たい子「冬の物語」、石川淳「いすかのはし」、吉野秀雄「(歌) 秋篠寺」、岡本潤「(詩) 橋について」、伊藤整「出家遁世の志」、太宰治「父」の諸作が掲載されている。

現代小説を語る座談会・出席者坂口安吾、太宰治、織田作之助、平野謙・文学季刊・第三輯、現代作家十三人集・昭和二十二年四月二十日発行・

189～201頁

太宰治全集別巻の小山清編『太宰治研究』（筑摩書房、昭和三十一年六月三十日）に、全文収載された。

「大阪文学（無頼派文学研究）」復刊第十一号（昭和四十三年十一月一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 山本健吉「時評的感想」（『批評』第九巻第二号、第六十一号、昭和二十三年三月十日）には、つぎのように記されている。

坂口「君など秀作を書きすぎる方だよ。もつと大いに駄作をかけた方がいいのだ。太宰君は駄作を書かない人だな。」太宰「あなたはひ

どいよ。あなたは僕より少し年が上だ。それだけ甲羅が固くて、あんなへんな傑作ばかり書くんだな。」これはある座談会での対話であるが、酔っぱらつてしやべつたといふことは別として、それなりに彼等の面目は躍如としてゐるのである。かういふ言葉を文字通り受取つて論ずるのも気がひけるが、お互ひに秀作を書きすぎると言つて非難し合ふなんぞ、前には見られなかつた風景であらう。お互ひに君はまだまだアカデミックでデフォルマシヨンになつてゐないと言ひ合つてゐるのだ。小説とエッセーとの間のほどよい安住地点で作家意識の満足を味つてゐるのが彼等の文学なのだ。書き飛ばして書きなぐり、一作一作が或る種の歓びを読者に与へて読み棄てられて行けばそれで満足だといふ覚悟に徹した戯作者魂なら、それも立派であらう。その虚無的な作業の裏に作者が紅血をたらしてゐる姿など、人に垣間見さすべきことではないのだ。だがそれも要するにポーズであり、見てくれであつて、作者は案外ほどの堕落、ほどほどのデフォルメぶりにぬくぬくと気持よささうにあぐらをかいてゐるのであつたら……ああ、かういふことはもうどうでもよい。

〔付記〕 初出記録末尾には、「編輯者 附記」として、「この座談会は余りに面白過ぎて、一気に読めますので、わざとらしい小見出しは附けませんでした。」と記され、さらに、初出誌の倉崎嘉一「編輯後記」には、つぎのように記されている。

「現代小説を語る座談会」は、坂口、織田、太宰の、当代の流行作家に、評論家平野氏を加へて、オーソドックスの現代文学に痛烈な反撃を与へた、颯爽凛々たる文学座談会である。小説愛読者には絶対見

逃せない好読物だらう。殊に、織田作之助氏は本座談会を最後に、咯血、遂に起つ能はず、三十五年の短い生涯を終った。鬼才織田氏の最後の言々句々誠に痛烈人の肺腑を衝き、文学の鬼として斃れた氏の本領を余すなく發揮してゐる。私たちは本座談会を読んで、改めて織田氏の死を惜しみ、悼まずにはをられない。／尚、「現代小説を語る」座談会の形式は、毎号続けて行くつもりである。季刊ならではできない現代小説批判の新型式として、充分読者の期待にお応へしたい。

初出誌は、「昭和二十二年四月十日納本」「発行人増田義彦」「編輯兼印刷人内田基」「発行所／東京都中央区銀座西一ノ三／実業之日本社」である。また、初収刊本に収載の記録末尾には、つぎのような平野謙「附記」が掲げられている。

この座談会はたしか昭和二十二年二月に『文学季刊』のために催されたものである。雑誌社がわとしては、倉崎嘉一という小説なども書くわかい編集者が出席したが、その倉崎氏もふくめて、この座談会の出席者はことごとく死にたえている。太宰治は無論のこととして、他の三人もみな定命というのではなくて、無理強いのような最期をとげたのである。文字どおり私ひとりがロクロクとして生きのこつている次第だが、そう思つてこの座談会をよみかえてみると、なにか普通の座談会とはちがつた空気が最初から感ぜられて、私一個としては感慨の浅からぬものがある。

なお、この座談会は、昭和二十一年十一月二十五日夜に催されたと推定される。

女神・日本小説・五月創刊号、第一巻第一号・昭和二十二年五月一日発

行・71～77頁・「小説」欄

『女神』（白文社、昭和二十二年十月五日）に、全文収載された。

『誰も知らぬ』（ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』（八雲書店、昭和二十四年四月三十日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌所掲「女神」の挿絵は桜井浜江。なお、初出誌は、「昭和二十二年四月二十五日印刷納本」「編集人和田芳恵」「発行人秋田慶雄」「発行所／東京都中央区日本橋小綱町二ノ二／大地書房」で、同誌「小説」欄には、高見順「深淵」、丹羽文雄「人間模様」、林房雄「母の肖像画」、太宰治「女神」、関伊之助「裸婦」、林芙美子「肺が歌ふ―放浪記第三部―」の諸作が掲載されている。

あとがき・娯捨・ポリゴン書房・昭和二十二年六月十日発行・220～221頁

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「昭和二十二年早春」とある。

あとがき・パンドラの匣・双英書房・昭和二十二年六月二十五日発行・159頁

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「昭和二十二年晩春」とある。

〔追記〕 本稿は、左記のように連載してきた拙稿の、続篇に当るものである。

「太宰治著述一覽稿（Ⅰ）——自大正十二年至昭和七年——」（神戸女学院大学論集）第十九卷第三号、昭和四十八年三月十五日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅱ）——自昭和八年至昭和十年——」（神戸女学院大学論集）第二十卷第一号、昭和四十八年八月二十五日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅲ）——自昭和十一年至昭和十三年——」（神戸女学院大学論集）第二十卷第二号、昭和四十八年十二月十八日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅳ）——昭和十四年——」（神戸女学院大学論集）第二十卷第三号、昭和四十九年三月二十日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅴ）——昭和十五年——」（神戸女学院大学論集）第二十四卷第三号、昭和五十三年三月三十一日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅵ）——昭和十六年——」（神戸女学院大学論集）第二十五卷第一号、昭和五十三年七月三十一日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅶ）——自昭和十七年至昭和十九年——」（神戸女学院大学論集）第二十六卷第一号、昭和五十四年十月十五日）

「太宰治著述一覽稿（Ⅷ）——自昭和二十年至昭和二十一年——」（神戸女学院大学論集）第二十六卷第二号、昭和五十四年十二月二十日）

この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。伊藤誠之氏、柏木隆雄氏、河原義夫氏、瀬尾政記氏、相馬正一氏、谷沢永一氏、肥田皓三氏、渡部芳紀氏、国立国会図書館、日本近代文学館、筑摩書房、中日新聞東京本社、東奥日報社。なお、本稿は、神戸女学院大学研究所の研究助成による業績の一端である。

原稿受理 一九八四年九月十七日